

てこな・ミュージック・ジャーナル

ショパン生誕200年 第2回 ～子犬～

1810年にポーランドに生まれたショパンは、39歳で異国のフランスで結核を悪化させて死にました。悲しげな旋律はショパンの生涯と重ねられ、その孤独とともに語られることが結構あります。でも健康問題を深刻に抱えるようになる晩年をのぞいて、ショパンには動物をめぐる微笑ましいエピソードなどもあるのです。今回はそんなお話をいたしましょう。

14歳と15歳、ショパンは夏休みをクヤーヴィ地方のシャファルニャ村で過ごしています。ショパンはここで乗馬を始めました。その様子を友人に「とにかく乗ってはいる。馬は勝手に走る、僕は猿みたいにしがみついている」とユーモラスに書いています。広場にはアヒルや七面鳥が走り回ると、賑やかな村の描写を「通信」と題して家族に送りました。

名はマルキ

このようなショパンはフランスに滞在して15年、初めて犬を飼うことにしました。サンドとの相談の上なのはもちろんですが、ファッションにもっとも気を使って暮らすショパンが、毛を撒きちらす小犬を膝に抱いているなど想像もできません。でも本当に、その小犬を可愛がっていたのです。

一緒に暮らした犬の名はマルキです。マルキは小型犬でしたが、名前の意味はけっこう偉そうで、公爵という意味です。ただそれは仕草が威張っていたからではなく、どんなに勝手きままに走り回っても何をしても許される、そんな存在だからでしょう。

マルキをめくってもう一曲

マルキを題材に作られたのがあの有名な「小犬のワルツ」です。そしてもう1つ、この小犬をめくって作られたかもしれない曲があることを知っている方は少ないでしょう。曲の題は「galop marqui」と言います。「マルキのギャロップ」という意味ですが、作品番号はついていません。ただしこの曲を単にgalopとする作品表もあります。そうするとマルキとの関係は確定できないことになりますが、作曲年代は「小犬のワルツ」と同じ年1846年ですから、やはりgalop marquiなのかもしれません。曲想はどちらかという小犬よりも子馬のギャロップという雰囲気ですが、飛び跳ねている様子が目に浮かぶような可愛らしい曲です。

市川市文化振興財団 音楽総合プロデューサー 小坂 裕子

動物好きのサンド

ショパンと一緒に暮らしたジョルジュ・サンドは大変な動物好きでした。中部フランスのペリー地方でサンドが祖母から受け継ぎ終生愛して暮らしたノアンの館には、他に狩猟犬もブードルもいました。もちろん猫も、そして馬、ロバ、栄養価の高い卵を産む鶏もいました。マヨルカ島に行ったときは、乳を取るために山羊を飼っていますが、愛らしい様子に目を細めています。ロバはスカートに入れたパン屑をねらって鼻を押し付けてくると、サンドはそのユーモラスな仕草を楽しげに描写しています。中でもサンドがもっとも好きな動物は馬です。ストレス解消法でもあったのですが、馬車に乗るよりも手軽だからと、知人の家から月明かりの中、馬を駆って帰りました。農村地帯でその乗馬姿を知らない人はいません。何しろ、少女の頃からノアンの周辺では、サンドが髪をなびかせて馬で走りまわる姿を誰もが慣れていたのですから。

ショパンはロバに乗って

先ほど書きましたように、ショパンは学生時代、乗馬をしたことはありますが、乗りこなせるようになったわけではありません。ですからノアンでサンドと馬で遠出、ということにはなりません。馬車に乗るか、もしくはロバです。家族でピクニックに出かけることがありましたが、ショパンは往復歩くことはできません。帰りは疲れてしまって歩けなくなるので、連れていったロバの背に、サンドの勧めでまたがるのでした。体を動かすことよりも、部屋でじっとしているほうが好きなショパンは、体にいいからと誘われると出かけるのですが、山へ鉱石収集や、川へサケの稚魚を取りに行くときは、留守番することにしていました。川で水浴びするほどのサンドのエネルギーには、ショパンはついていけないからです。

蝶とコウモリが主人公

サンドが愛していた小さな生き物というと、蝶や蛾です。夏の田舎にはたくさん蝶が飛び、夜はローソクの灯りに集まってきました。昼間は見えない蛾が、蝋燭の明かりを求めて飛んでくると、羽の色が妖しく光ります。するとそこに、かすめるようにコウモリが飛んできて、美しい羽色の蛾を食べてしまいます。その様子をもとにサンドは、蝶とコウモリを擬人化する物語を書きました。この幻想的なお話を、ショパンに朗読して聞かせたかどうかは分かりません。ショパンはとりわけ蛾を嫌っていたようですから。

過去のてこな・ミュージック・ジャーナルはHP「てこなどっとねっと」<http://www.tekona.net/>でご覧になれます。